

ナスこうがい毛かび病の発生について

県内で栽培されているナスにおいて、果実に白色で毛足の長いカビを密生し、やがて腐敗する被害の発生を認めた。

病徴および標徴と、病原菌の形態的特徴から、本県で未発生であった「ナスこうがい毛かび病」と判断された。

＊ 特殊報：新規の有害動植物を発見した場合及び重要な有害動植物の発消長に特異な現象が認められた場合に発表するものです。

1 病害名 ナスこうがい毛かび病

Choanephora sp.

2 対象作物 ナス

3 発生確認の経緯

- (1) 令和7年8月中下旬、県内のナス栽培露地ほ場において、果実表面に白色で毛足の長いカビが密生し、先端に類球形の黒色小塊を生じるとともに果実が腐敗する被害が発生した。
- (2) 被害果を採取し、光学顕微鏡で検鏡観察したところ、無色透明で太い分生子柄と褐色で楕円形ないし紡錘形の孢子嚢を多数確認した。孢子嚢の表面には、縦縞条線をしばしば生じていた。
- (3) 観察された糸状菌の形態的特徴は *Choanephora* 属の記述と一致した。
- (4) 被害果の病徴と標徴、病原菌の形態から *Choanephora* sp. によるナスこうがい毛かび病による被害であると判断した。

4 本病の特徴

- (1) 被害果の表面に白色で長さ2～3mmのカビ（分生子柄）を密生し、先端に、大きさ0.2～0.4mmの黒色で球形ないし亜球形に見える孢子嚢塊を形成する（写真1・4）。
- (2) 果頂部から発病することが多い（写真1）。これは開花後の花殻が感染の足掛かりになるためと考えられる。
- (3) 被害部は腐敗し、しだいに果実全体に及ぶ（写真2）。被害果はしばしば汁液を漏出する（写真3）。
- (4) 腐敗臭は強くない。かすかな発酵臭を生じることがあり、ハナムグリ類が飛来し摂食することがある。
- (5) 分生子柄は無色で太い（写真5）。孢子嚢は褐色で球形ないし紡錘形、表面に浅い縦縞条線をしばしば生じる（写真6）。



写真1 被害果(果頂部からの腐敗)



写真2 被害果(果実全体が腐敗)

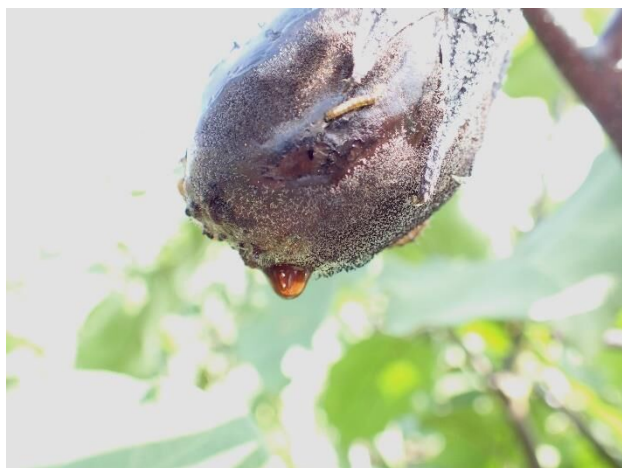


写真3 被害果(腐敗して汁液を漏出)

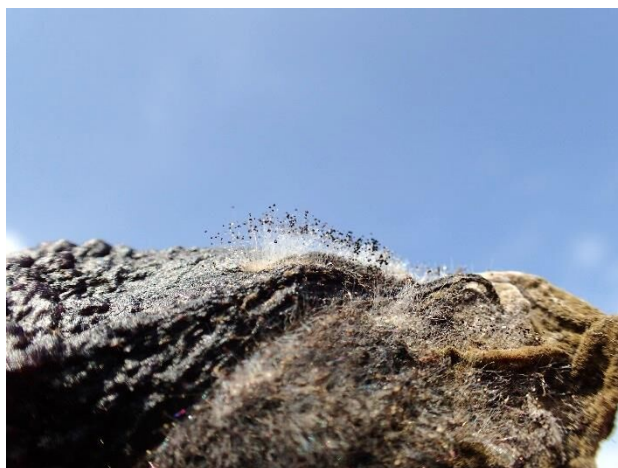


写真4 標徴(長い分生子柄と黒い胞子囊)

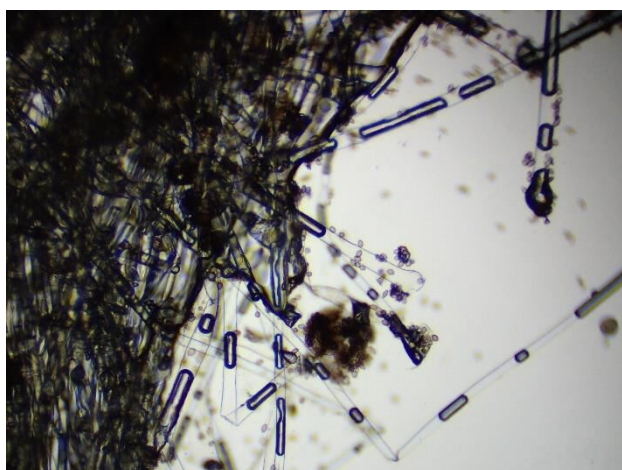


写真5 無色で太い分生子柄と胞子囊



写真6 胞子囊(縦縞条線を生じたもの: 矢印)
(写真は全点とも埼玉県病害虫防除所原図)

5 本病の発生生態

- (1) 病原菌の生育適温は高い。夏季に高温が長期間にわたって続き、過繁茂や適度な降雨によって環境中の湿度が高まると発生する。
- (2) 病原菌は開花後の花殻などで腐生的に増殖し、ここを感染の足掛かりとして果実に侵入して発病・腐敗させる。
- (3) 病原菌は多数の孢子嚢を形成し、これが伝染源になるとともに、本属菌は接合孢子を形成し越冬すると考えられる。
- (4) 本属菌による他作物の病害[※]として、*Choanephora cucurbitarum* によるホウレンソウ、エンドウ、ペチュニアなどの「こうがいかび病」、カボチャの「こうがい毛かび病」が知られる。なお、ナスこうがい毛かび病の病原は *Choanephora* sp. とされ、種の同定がなされていない。
- (5) 風雨によって孢子嚢が飛散し発生が拡大するほか、発病果に誘引された昆虫に孢子嚢が付着し、他の果実やほ場へ伝搬する可能性がある。

※出典：日本植物病名データベース https://www.gene.affrc.go.jp/databases-micro_pl_diseases.php

6 防除対策

- (1) 本病を対象とした登録農薬は無いため、耕種的・物理的対策をとる。
- (2) 発病果は重要な伝染源になるため、見つけ次第切除してほ場外で処分する。
- (3) 開花後の花殻はこまめに除去し、本病原菌の増殖源にならないようにする。
- (4) ほ場内および株内の通風をはかるため、過繁茂とならないようこまめに剪定や摘葉を行う。
- (5) 栽培管理の際に摘除した葉や枝、果実はほ場内に放置せず、ほ場外に持ち出すとともに土中深く埋めるなど適切に処分する。
- (6) 昆虫類による本病原菌の伝搬を避けるため、害虫防除を適切に行う。